

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 4 月

「闘争と勇気」「もう一度の機会（Ⅰ）」「目的と過程」「ココナッツシロップ餅菓子」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

もう一度の機会 (I)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

7

Conflict and Courage

現代の真理

「目的と過程」

38

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「ココナッツシロップ餅菓子」

42

レシピ

お話コーナー

「カルバリー (II)」

44

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年3月1日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page, Sermon View on page

44

Printed in Japan

すべての妨げを取り除く

魂の敵は人の思想を読むことが許されていない。しかし、彼は鋭い観察者であり、言葉に注目している。彼は行動に注意し、自分の力の及ぶ範囲に自らの身を置く人々の事情に合わせて、巧妙に自分の誘惑を適応させる。もしわたしたちが罪深い思想や感情を制止するために労し、それらを言葉や行動に表現しなければ、サタンは敗北する。なぜなら、彼は事情に合わせて自分のもっともらしい誘惑を準備できないからである。

しかし、なんとしばしば自称クリスチャンが、自制の欠如によって、魂の敵に對して戸を開いてしまうことであろう!…これは悪感情を制し、サタンが有利に用いることのできるすべての言葉を制する努力があまりに少ないためである。疎遠な気持ちが生じるとすぐに、事態はすぐにサタンが調べられるように広められ、…破壊するためにへびのような知恵と技能を用いる機会を与えてしまう。すべての不和には大きな損失がある。…

クリスチャンとして、わたしたちは道からつまずきの石を取り除くために働かなければならない。わたしたちはすべての障害を取り除かなければならない。すべての罪を告白し、捨てよう。こうして主の道が整えられ、このお方がわたしたちの集会に入ってこられて、ご自分の豊かな恵みを与えてくださるためである。世と肉と悪魔に對して勝利しなければならぬ。…

すべての教会員から世の前に着実な光が輝きでることが出来る。こうして彼らは、「一体これらの人々は他の人々より何が出来るのか?」と尋ねられるようなことにならないであろう。世への順応から身を引くこと、また悪と見られることはすべて遠ざけ、こうして反対者に何の機会も与えないことができるし、そうでなければならぬ。わたしたちは非難から逃れることはできない。しかし、自分自身の罪や愚かさのために非難されることがないように非常に気をつけるべきである。非難は、キリストのためであるべきである。

主が弱っている教会と悔い改めていない教会員に聖霊を注ぐことがおできになるように、神の民がすべての妨げを取り除くことほどサタンが恐れているものはない。もしサタンが自分の思うとおりにできるなら、世の終わりまで大小いかなる覚醒ももう決して起こることはないであろう。しかしわたしたちは彼の策略を知っている。サタンの力に抵抗することができる。神のみ霊のための道が開かれれば、祝福がおとずれる。サタンは、天の窓を閉じて雨が地上に降るのを妨げることはできないのと同じように、神の民に下る祝福の雨を妨げることもできない。神の民が服従し、悔い改めた心で罪を告白し、それを取り除き、信仰をもって神の約束を求めるならば、悪人も悪霊も、神のみ業を妨げることはできず、神の民の集まりから神の臨在を取り去ることもできないからである。どんな誘惑であろうと、神に敵対する影響力であろうと、それがあらわれていても、隠れていても、「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によ」って、神の民は打ち勝つことが出来る(ゼカリヤ4:6)。(セレクトド・メッセージ 1巻「16章リバイバルへの召しより 122-124」)

第16課 もう一度の機会（I）

第二の誕生

知的で、親切で、善良な者になることは、必ずしも人を幸せにはしませんし、また必ずしも平安を得させるわけではありません。幾百万もの人々が不幸ですが、その原因がいつも理解されているわけではありません。子供が生まれ、成長し、その後、若い成人になって同じ問題が続いているのを見いだします。つまり、至る所に問題と紛争があることです。多くの人々が人生における自分たちの目的を認識していませんし、人生の間もその終局でも、自分の起源や自分の目的地を知らずにいます。不確かでみじめで、あるいは苦しみの生活の後、人が死にます。何が目的だったのでしょうか？なお、そこには生きる理由や目的があるのでしょうか、もしくはあり得るのでしょうか？

わたしたちの存在にはただ一つの理由があります。そしてわたしたちの現在と将来の安全は、それを正しく理解することにかかっているがゆえに、真剣にこの問題について考える必要があります。それは命に関わる重要な問題です。もしわたしたちが内なる平安とより良い世界という希望を持っているならば、そのとき幸福になり、人生を非常に前向きに考えるようになります。

わたしたちの現在の状態では、将来の栄光の御国を受け継ぐ事は不可能です。多くの人々は自分たちが善良な人だと思っていますが、「すべての人は罪を犯した」という事実はなお存在しています（ローマ 3:23）。わたしたちに罪がないと言うならば、偽りを述べることになります（ヨハネ第一 1:8）。そうであれば、わたしたちは来たるべき世界の相続人となるために何をしなければならないのでしょうか？答えは非常に単純です。わたしたちは神のご要求を満たさなければなりません！わたしたちはもう一度生まれなければなりません。すなわち、神のみ旨と完全に調和している生き方に変わらなければなりません。これをこの課で学んでいきます。

なぜわたしたちは第二の誕生が必要か？

ずっと前にサンヒドリンの一員であるニコデモがある夜イエスと話すために訪れました。ニコデモは以前にイエスの教えを聞いており、深く感銘を受けていま

した。彼の心は開かれて、真理を知りたいと望んでいました。そして主人はすぐに彼のすべての質問に答えを与えて下さいました。

「イエスは答えて言われた、『よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない』」(ヨハネ 3:3)。

それから新生の意味が説明されました。「イエスは答えられた、『よくよくあなたに言うておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない』」(ヨハネ 3:5-7)。

聖霊によって生まれるというのは、再生されるという意味です。つまり、古い願望から愛情を引き離し、意志と愛情を神に置くことです。この変化が起こらない限り、人は神の御国に入ることはできません。人生におけるわたしたちの動機が神のみ旨と調和していないとき、わたしたちは自分自身の罪深い道をつまづきながら行くがままにされ、ついには「…死の支払う報酬は死である…」(ローマ 6:23)。

生来の人間の心は邪惡であらゆる種類の罪を選ぶ傾向があります。パウロは神のない人々の状態を描写して次のように言いました。「すなわち、彼らは、あらゆる不義と悪と貪欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、そしめる者、神を憎む者、不遜な者、高慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、無知、不誠実、無情、無慈悲な者となっている」(ローマ 1:29-31)。

使徒パウロはまた肉の思いと霊の思いを持つ人の間には何の関係も存在しえないことを説明しています。「なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。また、肉にある者は、神を喜ばせることができない」(ローマ 8:5-8)。

神の御目には、ご自分のみ言葉に従わない人々は死んでいる者とみなされます。彼らは神に逆らって働く者であり、怒りの子であって、すなわち靈的に死んでいる者であると、パウロは述べています。彼らの計画は地上生活という短い期間を考慮したものであり、彼らは現世と来世のための天の計画を無視しています。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。」(エペソ 2:1-3)

霊的に死んでいる者は感覚がありません。彼らの良心は焼き印を押されており、彼らの思いは麻痺しています。そしてこの状態にあつて彼らは自分たちの霊的な必要を理解することができませんし、生涯のより良い道に対する願いも持っていません。これらの人々を霊的な死からよみがえらせるために、何かがなされなければなりません。答えは福音です。ただ福音だけが命の火花を復活させることができます。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである」(ペテロ第一 4:6)。

再生が重要不可欠です。それがなければ、罪が許されることはありません。なぜ罪人が改心しなければならないかに注意して下さい。「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝 3:19)。

罪人は自分の必要を感じなければなりません。神の恵みを嘆願し、罪を忌み嫌わなければなりません。各自が自分の罪深い状態を認識し、悔い改め、決定的な変化を望む願望を示さなければなりません。そのとき、彼らは神に受け入れられるのです。

闘争と勇気

Conflict and Courage



4 月

4月1日

イスラエルにおける危機

「彼らはホレブで子牛を造り、鑄物の像を拝んだ。彼らは神の栄光を草を食う牛の像と取り替えた。」(詩篇 106:19, 20)

モーセの不在中、司法権がアロンにゆだねられていたので、大群衆は彼の天幕に集まって、「さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。……あのモーセはどうなったのかわからないからです」と要求した。……これまで、彼らを導いた雲は山の上に永久に止まってしまい、もはや旅の指示をしなくなったと彼らは言った。……

こうした危機には、確固とした決断と、なにものにもくじけない勇気の人が必要であった。それは、自分の人気や身の安全、自分の生命そのものよりも、神の栄光を重んじる人である。しかし、そのときのイスラエルの指導者は、そうした品性の人ではなかった。アロンは一応人々をいさめた。しかし、危機に臨んでためらい恐れる彼の態度は、ますます人々をかたくなにするだけであった。……神と結んだ契約を堅く保った者もいくらかあったが、大部分の人々は背信に加わった。……

アロンは、自分の身の安全を気づかった。彼は、神の栄光のために勇敢に立つかわりに、群衆の要求を受け入れた。……アロンはそれを用いて、エジプトの神をまねた子牛を鑄造した。人々は言った。「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」。こうしてアロンは卑劣にも、主がはずかしめられるのを許した。そればかりではなかった。アロンは、金の像が人々に歓迎されたのを見て、その前に祭壇を築き、「あすは主の祭である」と布告した。その布告は、ラッパによって組から組へと宿営全体に伝えられた。「そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立って戯れた。」「主の祭」をするという口実のもとに、彼らは飲食にふけり、みだらな騒ぎを演じた。

今日でも快樂を愛する心が「信心深い様子」のかげに隠れていることがなんと多いことであろう。礼拝の儀式を守りながらなおかつ人々が利己心または、肉欲の満足にふけることを許す宗教は、イスラエルの時代と同様に今日でも、多くの人々に喜び迎えられている。そして、教会の権威ある地位の人が、清められていない人々の欲するところを受け入れて、彼らが罪を犯すのを助長する柔弱なアロンのような人々が、まだいるのである。(人類のあけぼの上巻 370-372)

兄弟を失望させる

「モーセはアロンに言った、『この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか』。」(出エジプト 32:21)

アロンは、人々の要求が激しく、もし、彼らの願いに応じなければ、自分は殺されてしまったであろうと言って弁解しようとした。……

アロンが一般の人々よりは、はるかに祝福と栄誉を与えられていたために、彼の罪はそれだけ憎むべきものであった。「主の聖者アロン」が偶像を造り、祭りを布告した(詩篇 106:16)。モーセの代弁者として選ばれ、神ご自身が「わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている」と言われた者が、偶像礼拝という神に対する反逆を止めることができなかった(出エジプト記 4:14)。アロンは、エジプト人と彼らの神々を罰するために神に用いられた人であった。そのアロンが、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」という布告を鋳物の子牛の前で聞いても平然としていた(同 32:4)。モーセと共に山に行き、そこで主の栄光を見て、その栄光のあらわれは、何一つとして形に現わすことができないことを知ったアロンが、神の栄光を変えて、子牛の像を造ったのである。モーセの不在中、人々の支配を神からゆだねられた者が、人々の反逆を許したのであった。「主はまた、はなはだしくアロンを怒って、彼を滅ぼそうとされた」(申命記 9:20)。しかし、モーセの熱烈な祈りによって、彼は救われた。彼は、自分の大きな罪を悔いて心を低くしたために、再び神の恵みに浴することが許された。

もし、アロンが、どんなことになろうとも正しいことのために立つ勇氣を持っていたならば、彼は背信を防ぐことができたことであろう。もし彼が神に対する忠誠を堅く保ち、シナイにおける危機について人々に語り、彼らが神の律法を守ることを厳粛に神に誓ったことを思い起こさせたならば、この罪惡は止められたことであろう。しかし、彼が人々の希望に同意して、平然と彼らの計画を進めていく姿を見て、彼らは勇氣を増し、以前に計画していたことよりも、さらに大きな罪へと走っていった。……

神が罰をお与えになるすべての罪のうちで、他の人に惡を奨励することほど、神がきらわれるものはない。(人類のあけぼの上巻 376-379)

4月3日

顔と顔を合わせて

「人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られた。」(出エジプト 33:11 上旬)

金の子牛を作るというイスラエルの背信の後、モーセは再び民のために神に嘆願するため出かける。……彼は民に感化を及ぼすためには、まず神に力をいただかねばならないことを経験から学んでいた。主はしもべの誠実さと心からの無私の目的を読みとられ、人がその友と語るように、この弱々しい人間と顔と顔を合わせて交わるほどにご自分を低くされる。モーセは自分自身と自分の重荷をすべて完全に神に差し出し、率直にこのお方のみ前に自分の魂を注ぎ出す。主はご自分のしもべを叱らず、その哀願を聞こうとして身を乗り出される。……「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」という答えがくる。しかしモーセは自分がここで止めることができると感じない。彼は多くのものを得てはいるが、もっと神に近づいて、神のご臨在のもっと強い保証を得たいと切望する。モーセはイスラエルという重荷を負ってきた。圧倒されるような責任の重さを担ってきた。民が罪を犯した時、彼は自分自身が罪を犯したかのように鋭い自責の念にかられた。そして今、神がイスラエルを心が強情で頑迷なままに放っておかれるその恐ろしい結果についての光景が彼の魂を圧迫するのである。……モーセは非常に熱心に熱意をこめて嘆願するので、「あなたはわたしの前に恵みを得、またわたしの名をもってあなたを知るから、あなたの言ったこの事をすすめるであろう」という答えがくる。今、わたしたちはいかにもこの預言者が嘆願を止めるだろうと思いがちであるがそうではなく、彼の成功によって励まされる。モーセはほとんどわたしたちの理解を越えた聖なる親しさをもって、あえてなお神に近づこうとする。彼は「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示ください」と、人間が未だしたことのない懇願を今するのである。有限な、死を免れない人間から何という祈願がなされたことか。彼は拒否されるのだろうか。神はモーセをあつかましいとお叱りになるのだろうか。いいえ、わたしたちは「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」という恵みのみ言葉を聞くのである。……

モーセの忠実の中にわたしたちは、神との親しい交わりが人間にとってどれほど喜びにみちた特権であるかを見ることができる。(教会への証 5 巻 531-533)

異火

「さてアロンの子ナダブとアビフとは、おのおのその香炉を取って火をこれに入れ、薫香をその上に盛って、異火を主の前にささげた。これは主の命令に反することであつたので、」（レビ記 10:1）

ナダブとアビフは、モーセとアロンに次いで、イスラエルのうちで高い地位にあった。彼らは、特に主からの榮譽を受け、七十人の長老たちと共に、山で主の栄光を見ることを許された者たちであつた。しかし、それだからといって、彼らの罪の言い訳がなりたったり、それが軽く見すごされたりしてはならなかった。むしろ、このために彼らの罪はいつそう重くなった。人は、大きな光を受けたからとか、また、イスラエルの君たちのように山にのぼって神と交わり、神の栄光に浴する特権を得たからといって、自分はそのあとで罪を犯しても罰せられないと考えてはならない。また、このような榮譽を受けたのであるから、神は自分の罪をきびしく罰せられることはないと思つてはならない。そのように考えることは致命的な誤りである。与えられる光と特権が大きければ、その光に応じた徳と聖潔がそこに要求される。神は、これ以下のものはお受けになることができない。大きな祝福や特権を得たからといって、もう安全であると思ひ、軽率にふるまつてはならない。それらは、罪を黙認するものでもなければ、また、神が、その人々を厳格にあつかわれないと思つてよいものでもない。……

ナダブとアビフは、少年時代に自制の訓練を受けなかった。……彼らはかつてにふるまう習慣が長く続いたために、最も神聖な職務の責任を負わせられても、その習慣からぬけきれなかった。彼らは、父親の權威を尊ぶことを教えられていなかった。そして、彼らは神の要求に厳格に従う必要を認めなかった。アロンがあやまってむすこたちを甘やかしたために、ついに彼らは神の刑罰を受けなければならなくなった。

神は、民らが崇敬と畏怖をもつて神に近づき、しかも神の定められた方法に従わなければならないことを教えようとなさつた。神は、なまはんかな従順をお受けになることができない。厳肅な礼拝のときにあたつて、ほとんどすべてのことが神の指示どおりに行なわれるというだけでは不十分であつた。……だれも自分を欺いて、神の戒めの一部は不必要であるとか、神はご自分の要求なさることの代わりのものでも、お受けになるとか考えてはならない。（人類のあけぼの上巻 425, 426）

4月5日

注意を払うには酔いすぎていた

「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わされる者は無知である。」(箴言 20:1)

もしもナダブとアビウが、初めから酒をほしただけ飲んで半ば泥酔状態になっていなければ、この致命的な罪を犯すことはなかったであろう。彼らは神の臨在のあらわれる聖所にはいる前には、細心の注意を払って、厳粛に準備することが必要であることを承知していた。だが、彼らは不節制によって、清い職務にたずさわる資格を失ってしまった。彼らの心は混乱し、道徳的感覚は鈍り、神聖なものと世俗のものとの区別ができなくなってしまった。アロンとそのほかの子らはこう警告された。「……ぶどう酒と濃い酒を飲んでではならない。……これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものと清いものとの区別をすることができる……ためである」。飲酒はからだを弱め、思想を混乱させ、道義を低下させる作用を持つ。それは、人に聖なるものの神聖さと、神の要求の拘束力を認めさせない。清い責任ある地位についた者はみな、きびしく節制を守って頭脳を明せきにして善悪を区別し、原則に堅く立ち、公正を行ない、あわれみの心を持つ知恵がなければならなかった。

それと同じ義務が、キリストに従うひとりひとりに負わされている。……あらゆる時代のキリストの教会に、この厳粛で恐るべき警告が与えられている。すなわち、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(コリント第一 3:17)。(人類のあけぼの上巻 427-429)

アロンの息子たちの事件は神の民のための益になるようにと記録されており、キリストの再臨に向けて準備をしている者たちにとって特に教訓となるべきである。それは、墮落した食欲の放縦は魂の健全な感覚を破壊し、神が人に与えてくださっている理性の力に非常に影響するので、霊的なまた聖なる事柄がその神聖さを失う。不従順が非常に罪深いものと思えずむしろ魅力的に思える。(節制 149)

まちがった愛

「主はそのしもべモーセと、そのお選びになったアロンとをつかわされた。」(詩篇 105:26)

アロンは、モーセと共に立ち、彼のために語るようにと、神が選ばれた愛想のよい気質の人であった。……神はアロンを指導者として選ぶこともおできになった。しかし心を知っておられ、品性を理解される神は、アロンが譲歩しやすく、どのような状況にあっても、結果を考えないで正義を守るために立つ道徳的勇氣に欠けていることを知っておられた。人々によく思われたいと思うアロンの気持ちは、時々彼が大きな過ちを犯すよう導いた。……彼の家族の内にあった正義に対する断固とした態度の欠如が二人の息子の死という結果をもたらした。……ナダブとアビウは神のみに、薫香と共に香炉に神聖な火を捧げるようにという神の命令を敬うことに失敗した。……

ここに節度のない規律の結果が見られる。このアロンの息子たちは父親の命令を尊重し敬うよう教育されていなかったのも、また親の権威に注意を払わなかったのも、彼らは神のご要求に明確に従う必要をはっきりと理解しなかった。……神のはっきりとした指導に反対して、彼らは神聖な火の代りに普通の火を捧げることにより、神を辱めた。神は彼らに憤りをあらわされ、み前から火が出て彼らを滅ぼした。

アロンは忍耐とへりくだった服従をもって厳しい苦悩に耐えた。悲しみと鋭く激しい苦痛が彼の魂を苦しめた。彼は義務の怠慢についての宣告を受けた。アロンは民の罪をあがなういと高き神の祭司であった。彼は自分の家族の祭司でもあったが、子供たちの愚行を見過ごしにしがちであった。子供たちを従順にし、自制をさせ、親の権威を尊重するよう訓練し教育するという義務を無視していた。放縦についてのまちがった考えを通して、アロンは永遠の事柄に対する崇高な尊敬の念をもって、子供たちの品性を形作ることに失敗した。アロンは、多くのクリスチャンの両親が今日、見ている以上のことを見てはいなかった。アロンのまちがった愛と、不正を犯した子供たちの放縦は確かに神のご不興をかう準備を彼らにさせていた。……親の抑制力をしっかりと働かせることのない、アロンの優しい忠告と息子たちに対する無分別な優しさはこの上ない残酷な行為であった。(教会への証 3 卷 293-295)

4月7日

弱くなった魂

「しかし彼らはまもなくそのみわざを忘れ、その勧めを待たず、野でわがままな欲望を起し、荒野で神を試みた。主は彼らにその求めるものを与えられたが、彼らのうちに病気を送って、やせ衰えさせられた。」(詩篇 106:13-15)

彼らの食欲が制限されるたびに、イスラエル人は不満に思っつつぶやき、モーセとアロン、そして神に対して不平を言った。(SDA バイブルメントリ- [E・G・ホイト・コメント] 1 巻 1102)

神は、人々があまりにもほしがるために、彼らのために、最善のものではなかったが、お与えになった。彼らは、自分たちのからだのためになるものでは満足しなかったのである。彼らの反逆的欲求は満たされたけれども彼らは、そのために苦しまなければならなかった。彼らは、食べただけ食べた。彼らの不節制は直ちに罰せられた。……多くの人々が熱病で倒れた。一方、彼らの中の最も罪深い人々は、彼らがほしがった食物を口にするやいなや、打たれた。(人類のあけぼの上巻 457)

神は、マナと同様に肉もたやすくお備えになることができたのであるが、それが与えられなかったことは、彼らのためを考えた上でのことであった。多くの者がエジプトで食べ慣れていた刺激性の食物よりも更により食物を与えることが、神のみこころであった。ゆがめられた食欲を、もっと健康な状態にもどさなければならなかった。それは、神がエデンの園で、アダムとエバにお与えになった地の果実など、人間に最初に与えられた食物を楽しむことができるようになるためであった。イスラエルの人々に動物の肉がほとんど与えられなかったのは、こうした理由からであった。

サタンは、こうした制限が不正で残酷なもののように人々に思わせた。サタンは、禁じられたものを、人々がほしがるようにしむけた。なんの制限もなく食欲をほしいままにすれば、肉欲にふけりやすくなるのをサタンは知っていた。こうして、人々はたやすく彼的手中に陥った。病気と不幸の創始者は、最も成功をおさめる場所で人々を攻撃する。サタンは、エバに禁断の実を食べるように誘惑してからこのかた、主として食欲への誘惑によって、人々を罪に陥れた。サタンがイスラエルの人々を神に対してつぶやかせたのも、この同じ方法によってであった。飲食の不節制は、人々を低い欲望にふけらせるもととなり、ひいては、人々にすべての道徳的義務を無視させる原因になる。彼らが誘惑に襲われるならば、なんの抵抗力ももたないのである。(同上 450, 451)

二人が一人を

「なぜあなたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか。」(民数記 12:8)

ミリアムは、モーセとアロンに次いで、人々から愛され、天の誉れを受けていた。しかし、天で初めに不和をもたらした同じ罪悪がミリアムの心に起こり、その不満にすぐ同情した者があった。……

もし、アロンが正しいことのために堅く立ったならば、このような悪をとどめることができたことであろう。しかし、アロンは、ミリアムにその行動が罪深いものであることを示さずに、かえってミリアムに同情し、彼女のつぶやきの言葉を聞き、そのねたみに同意するようになってしまった。(人類のあけぼの上巻 457-459)

七十人の長老を任命することに関して、ミリアムとアロンは、なんの相談も受けなかった。そのために、彼らはモーセに対してねたみをいだいた。……ミリアムとアロンは、モーセがどんなに重い苦勞と責任を背負っていたかを知らなかった。しかし、彼らは、自分たちがモーセを助けるように選ばれたために、自分たちも同じように指導の責任を分担したものと考え、それ以上の助け手を任命することはよけいなことであると考えたのである。……

『主はただモーセによって語られるのか。われわれによっても語られるのではないのか』(民数記 12:2)。自分たちも同様に神の恵みを受けているとみなして、自分たちも同じ地位と権威が与えられているものと感じた。……

神はモーセを選んで、神の霊を彼の上にお与えになったのである。そして、ミリアムとアロンは、つぶやいたことによって、定められた指導者に対してばかりでなく、神ご自身に対して、不忠誠の罪を犯したのである。……

神の民の指導者と、教師としての重い責任を人々に負わせられた神は、人々がそのしもべたちをどのようにあつかうかの責任を問われる。われわれは、神が尊ばれた人々を尊ばなければならない。神が、神の働きの重荷を負わせられた人々をねたみ、つぶやくすべての者にとって、ミリアムに下った罰は、自分に対する譴責であると思わなければならない。(同上 458-462)

4月9日

最も悪魔的な性質

「憤りはむごく、怒りははげしい、しかしねたみの前には、だれが立ちえよう。」（箴言 27:4）

モーセは彼らの非難をつぶやかず、黙って耐えた。モーセが人々の不信とつぶやきを忍耐し、彼のゆるがぬ助け手であるべき人々の誇りとねたみに耐えることができたのは、ミデアンで苦勞しながら待っていた年月の間の経験、すなわち、彼がそこで得たけんそんと忍耐の精神のおかげであった。モーセは、「その人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」（民数記 12:3）。そのため、モーセは、すべての人にまさって神の知恵と指導とが与えられていた。聖書に、「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる」とある（詩篇 25:9）。柔和な者は、すなおで、喜んで教えを受けるから、主に導かれるのである。

.....

「主は雲の柱のうちにあって下り、幕屋の入口に立って、アロンとミリアムを呼ばれた」（民数記 12:5）。……「主は彼らにむかい怒りを発して去られた」。神の怒りのしるしとして、雲が幕屋から離れた。そして、ミリアムは打たれた。彼女ばらい病となり、その身は雪のように白くなった」。……こうして彼らの誇りは打ち砕かれて、アロンは自分たちの罪を告白し、ミリアムがこの恐ろしい罰を受けたまま滅びることがないように嘆願した。モーセの祈りにこたえて、ミリアムのらい病はいやされた。しかし、ミリアムは七日の間、宿営の外に閉じ込められた。……

このように主の怒りがあらわされたのは、イスラエル全体に対する警告のためであって、不満と不服従の精神が強くなるのを防ぐためであった。もしも、ミリアムのねたみと不満とが著しく譴責されないまましていると、さらに大きな害毒を及ぼしたことであろう。ねたみは人の心の中の最も悪魔的な性質の一つであって、最も恐ろしい結果を生じるものである。……初めに天で不和を起こしたのは、ねたみであった。そして、ねたみのゆえに人人の間に数えきれない害がもたらされた。「ねたみと党派心とのあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為とがある」（ヤコブ 3:16）。（人類のあけぼの上巻 459-462）

矛盾した報告

「そして彼らはその探った地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言った。」(民数記 13:32)

主はカナン之地を探るために人をつかわすようにとモーセに命じられた。その地は主がイスラエルの子らに与えようと思っておられる地であった。……彼らがカナン之地が肥沃であることについて、語った後、二人以外のすべての者は、この地を所有する可能性について非常に落胆させるように話した。……民はこの報告を聞いて、激しい非難と嘆き悲しみのうちに自分たちの失望を爆発させた。彼らは、自分たちをこれほど遠くまで連れてこられた神が、必ずこの地を自分たちに与えて下さるということをよく考えようとしなかった。……

カレブは急いで前に出たので彼のはっきりとした響き渡る声は群衆の叫び声を圧して聞こえた。カレブは、全イスラエルの信仰と勇気を弱めてしまった斥候たちの臆病な見解に反対した。彼が人々の注意を引いたので、彼らはカレブの言うことを聞こうとして一瞬つぶやくのを止めた。……しかし彼が話しはじめた時、不忠実な斥候たちは「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」と言って、カレブの言葉をさげすんだ。

間違った道に進み始めたこの人々は、自分の心を神に対し、モーセとアロンに対して、そしてカレブとヨシュアに敵対させた。間違った方向に進んだ一步一步が、カナン之地を所有する一つ一つの試みを妨げようとするその計画をますます強固なものにした。彼らは自分たちの有害な目的を遂行するために真理を曲げた。彼らは気候が健康的ではないと言い、すべての人々が巨人であると言ったのである。

……

これはただ悪質な報告というだけではなくて、うそでもあり、矛盾したことであった。なぜなら、もしも土地が不健康であって、住民を滅ぼす地であるのなら、どうしてその人々はそれほどまでに巨人になったのであろうか。責任ある地位の人々が、自分の心を不信仰へ明け渡すなら、悪意をもって進むのを止めるものはない。……もし二人だけが悪意にみちた報告を持って帰り、他の十人が、主のみ名によってその地を所有するようにと民を励ましたとしても民はそのよこしまな不信仰のゆえに、十人の方ではなく二人の忠告を採用したことであろう。(教会への証 4 卷 148-151)

4月11日

なぜ待つのか

「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます。」(民数記 13:30)

カレブに勇気を与えたのは神を信じるその信仰であった。この信仰が……正義を守るために、カレブを勇敢にまたゆるぐことなく立たせることができたのである。天軍の力強い司令官であられるその同じ気高い源から、キリストの十字架を負う真の兵士はみな、しばしば克服できないように思える障害に打ち勝つ力と勇気を受けなければならない。……自分の義務を果たしたいと思う者は、神が自分に与えて下さるみ言葉を語る準備をたえずしていなければならない。そしてその言葉は疑いや失望、落胆させる言葉であってはならない。……

疑っている者が不可能について語ったり、高い壁や強い巨人のことを思っ
てふるえている間に、「他の精神」を持っている忠実なカレブに前へ来させなさい。救いをもたらす神の真理は、不忠実な斥候がしたように牧師や信者であると自称する者が、真理の道を生け垣でふさがなければ、民のところへ出て行くのである。
……

人はこの働きに従事しなければならない。熱心さと活力が増さなければならない。怠惰によってさびついているタラントを奉仕へ活用させなければならない。「待ちなさい。あなたに負わされている重荷を負おうとしてはならない」と言う声は臆病な斥候の声である。わたしたちは今、先頭に立って押し進むカレブ、勇気ある言葉で、即、行動するよう、うながす力強い報告をするカレブを必要としている。背の高い巨人と近寄りたが壁に恐れをなす、利己的で安逸を愛し、あわてふためいた人々が、引き返すことをやかましく要求する時に、カレブの声が聞こえるようにしなさい。たとえ臆病な者がその手に石を持ち、忠実な者をその忠実な証のゆえに打ち殺そうとかまえていても。(教会への証 5 巻 378-383) 忠実なカレブが召されるのは、不信仰な者が神のみ言葉に侮りを投げかける時である。その時こそ、忠実な者は誇示することなく、非難を恐れることなく自分の持ち場で義務に堅く立つ。不信仰な斥候たちは、カレブを殺す用意をして立っていた。カレブは偽りの報告をもたらした者たちの手に石があるのを見たが、それが彼を思いとどまらせはしなかった。カレブはメッセージを持っており、それを伝えたいと願った。同じ精神が、神に忠実な人々によって今日も表わされるであろう。(レクテッド・メッセージ 2 巻 369)

陣営での反乱

「こういう人々は、大胆不敵なわがまま者であって、栄光ある者たちをそしってはばかりとこがない。」(ペテロ第二 2:10)

神が自分たちを救うために用いられる器を拒否し、軽べつすることほど、神への大きな侮辱はあり得ない。……

天においてサタンを反逆させたのと同じ精神が、小規模ではあったが、コラの反逆のなかに見られたのである。神の統治に対する不満をルシファーにいだかせ、天の秩序をくつがえそうとさせたのは、誇りと野心であった。サタンは墮落以来、この同じねたみと不満、地位や名誉に対する野心を人間の心に植えつけようとしてきた。こうして、彼は、コラ、ダタン、アビラムの心を動かし、自己高揚心を起こさせ、ねたみ、不信、反逆の精神をかきたてたのである。サタンは彼らに、神の任命された人々を拒ませて、彼らの指導者であられる神を拒否させたのである。彼らは、モーセとアロンに向かってつぶやき、神を冒瀆してながらも、なお、自分たちは正しく、彼らの罪を忠実に譴責した人々をサタンに動かされているとみなすほどに欺かれていた。

コラの滅亡の根底に横たわっていた同じ悪が、なお、存在しているのではなかろうか。誇りと野心は広く人の心を支配している。そして、この精神は、ねたみと、最高の地位を求める心を起こさせる。魂は神から離れ去って、無意識のうちにサタンの側に引かれるのである。多くの者、また、キリストの従者であると公言する者でさえ、自分を高めるために熱心に考え、計画し、努力している。そして、人々の共鳴と支持を得るためには、あえて事実をもまげ、主のしもべたちを偽って悪く言い、自己の心のいやしい利己的動機を、彼らの動機であるかのように非難するのである。十分の証拠があるにもかかわらず、虚偽をくりかえしているうちに、彼らはついにそれを事実であると思うようになる。神が任命された人々に対する民の信頼を失わせようとしていながら、自分たちは善事を行ない、真に神に奉仕していると思い込むのである。……

人間は、罪にふけることによって、心の中にサタンがつけ込むすきを与える。そして、一つの悪から次の悪へと進んでいく。光の拒否によって思考は暗く、心は堅くなる。そして、容易に次の罪を犯し、さらに大きな光を拒み、ついには罪を犯すことが習慣になってしまうのである。罪は彼らにとって、悪いものとは思われなくなる。(人類のあけぼの上巻 486-489)

彼は忍耐を失った

「だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。」(ヤコブ 1:4)

モーセは地上に住む者のうちで最も柔和な人であったという事実にもかかわらず、一度神のご不興をこうむった。……自分の身にふりかかった民の不当な非難が、モーセに、彼らのつぶやきは自分に対してではなく、神に対してであることを一瞬忘れさせてしまったのである。そして神のみ霊が侮辱されたので深く悲しむかわりに、いらいらし、感情を害して、身勝手な我慢のない態度で、「そむく人たちよ、聞きなさい。われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならぬのであろうか」と言いながら、その岩を二度打ったのである。……

モーセは民の前で大きな弱さをあらわした。明らかな自制心のなさ、すなわちつぶやく人々が持っているのと同じ精神を示したのである。彼は自分の側からこの誤った行為をすることによって、自分たちの失敗や不満、不当なつぶやきをすぐに言い訳する群衆の前で、寛容と忍耐の模範となることができなかった。最も大きい罪は僭越にも神の立場を取ったことにあった。モーセが今まで占めていた名誉ある地位は、彼の罪を減らすのではなく、むしろもっとその罪を大きいものにした。今までなんら欠点のなかったモーセが今つまずいたのである。同様の立場にある多くの人が、自分たちの罪は長年にわたる揺れ動くことのない忠誠のゆえに見過ごされるであろうと判断しがちである。しかしそうではない。神から栄誉を受けている者にとって激しい感情を表して品性の弱さを示すのは、その人がもっと責任の少ない立場を占めている時よりも、もっと深刻なことである。モーセはキリストを代表する者であったが、そのかたちが損なわれてしまったとはなんと悲しいことであろうか。モーセは罪を犯した。そして彼の過去の忠誠は現在の罪を贖うことはできなかった。……モーセとアロンはカナンに入らないで死ぬことによって、荒野で死ななければならなかった人々に降りかかったのと同じ罰を受けたのである。彼らは表現し難いほど心に悲しみを覚えたけれども服従してひざまずいた。そして神に対する彼らの愛と信頼は揺るがなかった。……しかしほとんどの者が罪の罪深さに気づいていない。……モーセとアロンの場合は……言葉においても、思いや行動においても罪を犯すのは安全ではないことを示している。(教会への証 4 巻 369, 370)

罪に言い訳はない

「彼らはまたメリバの水のほとりで主を怒らせたので、モーセは彼らのために災にあった。これは彼らが神の霊にそむいたとき、彼がそのくちびるで軽率なことを言ったからである。」(詩篇 106:32, 33)

もし、モーセとアロンが自尊心をいだいたり、神の警告と譴責に対して怒りをいだいたりしたならば、彼らの罪はさらに大きくなったことであろう。しかし、彼らは、故意、または、計画的な罪を犯したのではなかったから、その責めは受けなかった。彼らは、突然の誘惑に負けたのであって、それをすぐに心から悔い改めたのである。主は、彼らの悔い改めを受け入れられた。しかし、彼らの罪が民の間におよぼす害を考えられたときに、刑罰を免じることはおできにならなかった。……

神は人々の大きな罪をお許しになったのであるが、指導者の罪は、指導されるものの罪と同一に扱うことはできなかった。神は、地上のいかなる人よりも、モーセを尊ばれた。……モーセが、大きな光と知識を与えられていたことが、彼の罪をさらに重いものにした。過去の忠誠も、一つの誤った行為の償いにならない。人に与えられた光と特権が大きければ大きいほど、その責任も大きくなり、その失敗がはなはだしいほど、刑罰も重くなるのである。

モーセは、人々が考えるほどの重罪を犯したわけではなかった。……しかし、もし神が、ご自分の最も忠実で尊ばれたしもべの罪に対してこれほどきびしい処置を取られたのであれば、他の者の罪も許されないことであろう。……

神を信じると公言する者は、すべて、どんなに腹だたしいことが起こっても、心を守り、自制するという神聖な責任が負わせられている。モーセに負わせられた重荷は非常に重かった。彼のようなきびしい試練を受ける人は、今後、またとないであろう。しかし、そうだからといって、これは彼の罪の許しの口実にはならなかった。神は、神の民のために十分な準備をしておられたのである。そして、もし彼らが神の力に信頼していたならば、彼らは環境にもあそばれるようなことはなかったであろう。どんなに激しい誘惑であっても、罪の言いわけにはならない。どんな圧力が魂に加えられたにしても、犯罪は、われわれ自身の行為なのである。この世と陰府のいかなる力も、人間に悪を強制することはできない。サタンは、われわれの弱点を攻撃するが、われわれは負ける必要はない。攻撃がどんなに激しく、不意に襲ってきても、神はわれわれに助けを備えられた。われわれは、神の力によって勝利することができるのである。(人類のあけぼの下巻 16-20)

4月15日

墓から栄光

「その時わたしは主に願って言った、『主なる神よ、あなたの大いなる事と、あなたの強い手とを、たった今、しもべに示し始められました。天にも地にも、あなたのようなわざをなし、あなたのような力あるわざのできる神が、ほかにありましょうか。どうぞ、わたしにヨルダンを渡って行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見ることのできるようにしてください』。しかし主はあなたがたのゆえにわたしを怒り、わたしに聞かれなかった。そして主はわたしに言われた、『おまえはもはや足りている。この事については、重ねてわたしに言ってはならない。』(申命記 3:23-26)

キリストの犠牲によって実証されるまで、モーセをあつかわれた神の方法ほどに、著しく神の正義と愛をあらわしたものはほかになかった。神は、忘れてならない教訓、すなわち、神は厳密な従順をお求めになるということ、また、人は創造主に帰すべき栄光を自分に帰してはならないということを教えるために、モーセをカナンから締め出された。神は、イスラエルの嗣業にあずからせてほしいというモーセの祈りを、受け入れることがおできにならなかった。しかし彼は、ご自分のしもべを忘れたり、捨てたりなさらなかった。天の神は、モーセが耐えてきた苦悩を理解し、争闘と試練の長い年月を忠実に仕えてきた一つ一つの行為をご存じであった。神は、ピスガの頂上で、地上のカナンとは比較にならないほど輝かしい嗣業にモーセをお召しになったのであった。

モーセは、天に移されたエリヤと共に変貌の山に現われた。彼らは、天父からみ子に光と栄光を伝えるためにつかわされた。こうして幾世紀も前にささげられたモーセの祈りがついに果たされた。彼は、神の民の嗣業の中にある「良い山地」に立った。……

モーセはキリストの型であった。……イスラエルの群衆を地上のカナンに導く準備をさせるために、神は、モーセを苦難と困窮の学校で訓練するのをよしとされた。天のカナンに向かう神のイスラエルには、天来の指導者としての務めを果たすのに、人間の教えを必要としない指揮官がおられる。だが、その彼も苦難を通して全うされ、こうして、「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル 2:18)。われわれの贖い主は、一つとして人間的弱さや欠陥を表わされなかったが、われわれが約束の地にはいることができるために死なれた。

「さて、モーセは、……仕える者として、神の家の全体に対して忠実であったが、キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神の家なのである」(同 3:5, 6) (人類のあけぼの下巻 97, 98)

報酬のための預言

「彼らは正しい道からはずれて迷いに陥り、ベオルの子バラム、報酬さえ得られれば、悪に対して良心のとがめを感じないバラムの道に従った。」(ペテロ第二 2:15, 16 フィリッパス訳)

バラムは、かつては、善人であって、神の預言者であったが、背教して欲に目がくらんでいた。それでいてもなお自分はいと高き者のしもべであると自称していた。彼は、神がイスラエルのためになされたみわざについて無知ではなかったから、使者が用向きを伝えたとき、自分としては、バラクの報酬を拒み、使者を去らせるのが義務であることをよくわきまえていた。それにもかかわらず、彼はあえて誘惑に手を出し、主に勧告を求めるまでは、はっきりした解答を与えるわけにはいかないと言って、その夜は、使いの者たちを泊ませた。バラムは自分のろいがイスラエルに災いをもたらし得ないことを知っていた。神が、彼らについておられ、彼らが神に誠実であるかぎり、地の上、また、黄泉のどんな敵対力も勝つことはできなかった。しかし、「あなたが祝福する者は祝福され、あなたがのろう者はのろわれる」と使者に言われて、彼はうぬぼれた。高価な贈り物の贈与、また、高い地位の約束などによって、彼は欲を起こした。彼は、贈られた宝を欲ばって受け取った。そして、口では神のみ旨に厳格に従うと言いながら、バラクの願いに応じようとした。……

神が、偶像であると言明されたむさぼりの罪によって、彼は日和見主義者となってしまった。この一つの過失によって、サタンは、彼を完全に支配するようになった。彼を破滅に陥れたのは、このむさぼりであった。誘惑者は、人々を神に仕えさせないようにしようとして、常にこの世の利得と名誉を提供する。あまり良心的すぎでは繁栄しないとサタンは人々に言う。こうして、多くの者は、厳格な誠実の道から離れるように誘われるのである。悪の一步は、次の一步をたやすくする。彼らは、ますます僭越になる。彼らはひとたび貪欲と権力欲に支配されると、どんな恐ろしいことでも、あえてするようになる。多くの者は、自分はこの世の利得のために一時的に厳格な誠実の道を離れてもかまわないと思い、そして、目的が達せられたならば、いつでもそれをやめられると考えている。そのような人はサタンのわなに陥り、それから逃げるができないのである。(人類のあけぼの下巻 45, 46)

4月17日

義務か欲望か

「かえって、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかったので、」(箴言 1:25)

夜、神の使いがバラムを訪れ、こう伝えた。「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。またその民をのろってはならない。彼らは祝福された者だからである」
.....

バラムは、二度試みられた。彼は、使者の懇請に答えて、自分が非常に良心的で誠実であって、金銀がどんなに積まれても、神のみ旨に逆らって出かけることはできないことを強調した。しかし、彼は、王の求めに応じたいと願っていた。神のみ旨が、すでにはっきりと知らされていたにもかかわらず、彼は、使者たちに、しばらくとどまるように勧め、もう一度神に尋ねてみようと言った。彼は永遠の神を、あたかも人間のように説得できると思った。

夜、主はバラムにあらわれて言われた。「この人々はあなたを招きにきたのだから、立ってこの人々と一緒に行きなさい。ただしわたしが告げることだけを行わなければならない」。バラムはすでに心に決めていたので、主は、ここまでバラムが自分の思い通りにすることを許されたのである。バラムは、神のみ旨を行なうことを求めず、かえって自分の道を選び、主の承認を得ようとつとめたのである。

今日も、同様のことをするものが数多くいる。彼らは、自分たちの傾向と一致しているならば、どんな義務も困難なく理解する。それは、聖書が明らかにし、環境と理性も共にそれをはっきり示しているのである。しかしこうした証拠が彼らの欲望と傾向に反するものであるため、彼らは、しばしば、それがないがしろにして、神のみ前に出て、自分の義務を知ろうとする。彼らは、一見、非常に良心的にふるまい、光を求めて長い祈りをささげる。しかし、神を軽んじることはできない。神は、そのような人々が、欲望のままに行なって、その結果、苦しむことをお許しになることがよくある。……義務をはっきり示されたとき、それを実行しなくてもよいという許しを受けるために、神に祈ろうなどと思ってはならない。かえって謙虚なへりくだった心をもって、その要求を履行するために、神の力と知恵を求めるべきである。(人類のあけぼの下巻 47, 48)

同類の二人

「それから人々にむかって言われた、『あらゆる食欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである』。」(ルカ 12:15)

バラムは神の民に対して宣言することのできなかったのろいを、彼らを罪に誘惑することによってついに彼らの上にもたらすことができた。(各時代の斗争闘下巻 276)

バラムは、彼の悪魔的な企てが成功するのを見た。彼は神ののろいがその民にくんだり、幾千の者が刑罰を受けるのを見た。しかし、イスラエルの中の罪を罰した神の義は、誘惑者がのがれるのを許さなかった。イスラエルとミデアン人とが戦ったときに、バラムは殺された。……

バラムの運命はユダのそれと同じであつた。彼らの性質は、互によく似ている。両者とも神と富にかね仕えようとして、完全に失敗した。バラムは真の神を知り、彼に仕えることを公言した。ユダはイエスをメシヤとして信じ、彼に従う者たちに加わった。しかし、バラムは主の奉仕を富と世俗のほまれを得る踏み石にしようと望み、これに失敗して、つまずき倒れ、滅びた。ユダは、キリストと結合することによって、メシヤがまもなく樹立すると彼が信じたこの世の王国において、富と昇進にあずかろうと期待した。彼の希望が裏切られると、彼は背教して破滅した。バラムもユダも大きな光を受け、大きな特典にあずかった。しかし、心にいだいた一つの罪が全人格を毒し、滅亡の原因となった。……

心に秘められた一つの罪は、徐々に性質を墮落させ、その高尚な能力をすべて悪い欲望に屈服させる。良心から一つの保護物を取り除くこと、一つの悪い習慣にふけること、義務の重要な要求を一度怠ることなどは魂の防壁を破り、サタンがつけ入って、われわれを誤らせる道を開くのである。唯一の安全な道は、ダビデのように、次の祈りを、毎日、まごころからささげることである。「わたしの歩みはあなたの道に堅く立ち、わたしの足はすべることがなかったのです」(詩篇 17:5)。(人類のあけぼの下巻 63, 64)

4月19日

傷跡を残す罪

「戒めはともしびである、教は光である、教訓の懲らしめは命の道である。これは、あなたを守って、悪い女に近づかせず、みだらな女の、巧みな舌に惑わされぬようにする。」(箴言 6:23, 24)

イスラエルの上に神の天罰をもたらした犯罪は不道德の罪であった。魂をわなにかけるための女たちの働きかけはベオルのバアルだけにとどまらなかった。イスラエルにおける罪人たちに罰が与えられたにもかかわらず、同じ犯罪が何度も繰り返された。サタンはイスラエルを完全に打ち倒そうとして最も活発に活動していた。パラムの助言によってバラクはわなをしかけた。イスラエルは戦いでは敵に勇敢に立ち向かい、彼らを阻止し、勝利者となったが、女たちが彼らの注意を引き、彼らの同席を求め、その魅力で彼らを喜ばせた時、彼らは誘惑に抵抗しなかった。彼らは偶像崇拜の祭礼に招かれて、酒を飲みたいだけ飲み、幻惑した精神をますます混乱させた。自制力や神の律法への忠誠心を保ちつづけなかった。彼らの感覚は酒で混乱し、汚れた情欲があらゆる防壁を打ち負かすほどに完全に支配したので、偶像崇拜の祭礼へ出席するという誘惑さえも招いたのである。戦いにおいては決してひるむことのなかった者、勇敢だった者が、最も卑しい情欲にふけるといふ誘惑に抵抗するために、自分の魂を防ぎ守らなかった。……彼らはまず淫らなことで良心を汚し、このようにしてイスラエルの神を侮りつつ、偶像礼拝によって神からますます遠く離れて行ったのである。

地上歴史の終りが近づくにつれて、サタンは全力を尽くして同じ方法、すなわち古代イスラエル人を約束の地に入る直前に誘惑したのと同じ方法で働く。サタンは神の戒めを守ると公言する人々、天のカナンへのほとんど境界線近くにいる人々にわなをしかける。彼は魂をわなにかけるために、また神の民であると公言する人々の一番の弱点を突くために最大限度にまで自分の能力を用いる。……

現在目を覚まして祈り、聖書を勤勉に探って、心の内に神のみ言葉をたくわえ、偶像礼拝的な考えや品位を落す行動で神に対して罪を犯さないようにし、このようにして神の教会が墮落することのないようにすることが、神の戒めを守る民の義務である。(ビュー・アンド・ヘルド 1887年5月17日)

勝利する唯一の方法

「この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのうちにしるされていることを、ことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。」(ヨシュア 1:8)

もし人々が、神が彼らのために計画している道に歩むならば、彼らはどんな人間の知恵よりも、はるかに優る知恵を所有する助言者を持つことだろう。ヨシュアが賢明な将軍であったのは、神が彼の導き手であったからである。ヨシュアが用いた最初の剣は、御霊の剣、すなわち神の言であった。……

主が憐れみのうちに、右にも左にも曲がってはならないと命じられたのは、彼の義の原則に反する最も強力な影響がもたらされようとしていたからであった。彼は、最も厳格な高潔な道をたどらなければならなかった。……もしヨシュアの前途に危機がなかったなら、神は彼に雄々しくあるよう何度も繰り返し命じられなかったであろう。しかしあらゆる心配のただ中であって、ヨシュアは神を導き手とした。

人がどのような困難の中にあっても、あらゆる緊急事態において、より賢明な助言を与えて下さるお方、いかなる境遇においてもより強力な防御であられる神よりも優れた導き手を見い出すことができると考える程、巧妙な欺瞞はない。……

主は我々の世界においてなすべき偉大な働きを持っておられる。主はすべての人に、なすべき主の働きをお与えになっている。しかし、人を導き手とすべきではない。惑わされないためである。これは常に危険である。聖書の宗教は、奉仕における活動の原則を具体的に表現しているが、同時にすべての知恵の源であるお方に、日々知恵を求める必要がある。ヨシュアの勝利とは、どのようなものであったのか。あなたは、昼も夜も神の言葉を思いなさい。ヨシュアがヨルダンを渡る直前、主の言葉が彼に与えられた……。これが、ヨシュアの勝利の秘訣であった。彼は神を導き手とした。

勧告者という立場にある人々は、無我の人、信仰の人、祈りの人、あえて自分自身の人間的知恵に頼らず、彼らの事業を営む最善の方法については熱心に光と知恵を求める人であるべきである。イスラエルの指揮官ヨシュアは、軽率に行動しないように、モーセが神によって与えられた命令—神の要求、叱責、制限—を忠実に記録していた書物を、勤勉にくまなく調べた。(「SDA バイブル・コメンタリー」[E・G・ホワイト・コメント] 2巻 993, 994)

4月21日

目には見えない協力者

「わたしは……あなたと共にあるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。」(ヨシュア 1:5)

イスラエルのカナンへの旅における体験を注意深く学びなさい。……我々は、主が古代の神の民に教えられた教訓で記憶を新たにすることによって、心と意思を訓練し続ける必要がある。そうすれば、主が彼らに対して計画されたように、我々にとっても、主の言葉の教えは常に、興味深く印象的なものとなるであろう。

エリコを征服する前日の朝、ヨシュアが出発したとき、彼の前に完全武装した一人の戦士が現れた。そこでヨシュアが、「あなたはわれわれを助けるのですか。それとも、われわれの敵を助けるのですか」と尋ねると、彼は答えた、「いや、わたしは主の軍勢の主将として今きたのだ」と。もしヨシュアの目が、ドタンにおけるエリシャの召使のように開かれて、その光景に耐え得たならば、彼はイスラエルの子らの周りに陣を張っている主の使いたちを見たことだろう。訓練された天の軍勢が、神の民のために戦おうとやってきて、主の軍勢の長が、指揮のためにそこにおられたからであった。エリコが陥落したとき、人の手はいっさい都の城壁に触れなかった。主の使いたちが砦を打ち倒して敵の要塞の中に入ったからであった。エリコを占領したのはイスラエルではなく、主の軍勢の長であった。しかしイスラエルは、彼らの救いの長に信仰を示すため行うべき役割があった。

戦いは毎日なされねばならない。大争闘は、暗黒の君と生命の君との間で、すべての魂をめぐる戦いである。……

あなたは神の代理者として、神に自らを任せるべきである。神があなたの協力を得て、あなたのために計画して指揮を執り、闘争を戦われるためである。生命の君が、その業の頭である。あなたが原則に忠実で、勝利を得ようと奮闘するとき、キリストの恵みによって情欲が抑えられ、我々を愛されたお方を通してあなたが勝ち得てあまりある者となるよう、彼は日々、自己と戦うあなたと共にいるのである。イエスはその戦地をくぐってこられた。彼はすべての誘惑の力をご存知である。彼はあらゆる非常事態に対処する方法と、あらゆる危険な道中を導く方法をご存知である。だから、彼に信頼しようではないか。(SDA バイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 2巻 994, 995)

神だけがそれをする事がおできになった

「そして祭司たちが雄羊の角を長く吹き鳴らし、そのラッパの音が、あなたがたに聞える時、民はみな大声に呼ばわり、叫ばなければならない。そうすれば、町の周囲の石がきは、くずれ落ち、民はみなただちに進んで、攻め上ることができる。」
(ヨシュア 6:5)

エリコの占領において、力強い軍勢の司令官は人間が自分に名誉を帰すことができないような単純さを用いて、戦闘計画を立てられた。人が勝利の榮譽を得ることのないように、人の手が都の城壁を打ち崩してはならなかった。そのように今日も、人間は自ら成し遂げる働きの榮譽を自分自身に帰すべきではない。主だけが讃えられるべきである。人々が任務遂行のために、神からの指示を頼みにする必要性を悟るならどんなに良いことだろう。

主は、運命の定まった都の周囲に軍勢を配置なさった。それに向かつて人の手があげられることなく、天の軍勢はその城壁を打ち倒した。それは、神の御名だけが榮譽を得るためであった。それは、不信仰な斥候たちに恐怖を起こさせる程の、巨大な砦を誇る都であった。今、エリコの占

領において、神はヘブル人に、彼らの父祖たちが神にただ信頼していたら、彼らは40年前に都を占領していたであろうと言明された。(SDA バイブルメントリ- [E・G・ホワイト・コメント] 2巻 995)

弱い人間は、あらゆる激しい闘争の際に全能者のみわざを行うための超自然の力と助けを見出すであろう。忍耐強い信仰と神にある完全な信頼が成功を確実なものとする。

かつての悪の同盟軍が彼らに対して勢揃いする一方、主は強く、また雄々しく勇敢に戦うよう彼らに命じられる。彼らには勝ち取るべき天国があり、彼らの軍勢には、天使以上のお方、すなわち力強い司令官がおられて、天の軍勢を先導されるからである。エリコ占領の際、イスラエルの軍勢の内一人として、城壁を打ち倒すために限りある力を発揮させて誇ることはできなかったが、主の軍勢の長は、最も単純な方法で闘うように計画された。それは、主だけが榮譽を受け、人間が称賛されることのないためであった。神は、我々にすべての力を約束しておられる。約束はあなたとあなたの子供たちに、我々の神、主が召される限りの、離れたところにいるすべての人に与えられているからである。(同上 996)

わたしたちの救いの長に対する、絶え間ない信仰と信頼がなくてはならない。わたしたちは彼の命令に従わなければならない。エリコの城壁は、命令に従った結果崩れ落ちたのである。(同上)

4月23日

ひとりの人の罪

「金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。」(ヘブル 13:5 上句)

アカンは罪の知覚が鈍くなるまで、心の内で貪欲と欺瞞を育み、とうとう誘惑の餌食となった。知っている罪にあえてふける人々は、二度目にはもっとたやすく征服されるであろう。初めの罪は誘惑する者に戸を開き、彼は徐々にすべての抵抗を抑えて魂の砦を完全に占領する。アカンは貪欲の罪に対する警告を何度も繰り返して聞いていた。明確に述べられた神の律法が、盗みとあらゆるごまかしを禁じていたのに、彼は罪を心に抱きつづけた。見破られず、公然と叱責されなかったのも、彼はもっと大胆になっていった。彼は警告に次第に麻痺してきて、ついに彼の魂は暗黒の鎖に縛りつけられてしまった。(『SDA パイブル・コメント』[E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 997)

恥と敗北、そして死が一人の人の罪によってイスラエルにもたらされた。戦いの時に民の上をおおっていた保護が取り除かれた。クリスチャンであると公言する者が心に抱き、実践するさまざまな罪は教会に神のご不興をもたらす。……

教会にとって最も恐るべき影響は、公然とした反対者や無神論者、また神を冒瀆する者ではなく、キリストを公言しながら一貫性のない人の影響力である。この人々はイスラエルの神の祝福を隠しておき、たやすく拭い去ることのできない不名誉を教会にもたらす。……

キリスト教の精神は単に安息日に自分をひけらかしたり、聖なる場所で目立つようにすることではない。キリスト教の精神は週のうちの毎日、あらゆる場所で発揮されねばならない。礼拝において家庭において、また兄弟や世との業務取引において、キリスト教の要求を認め、またこれに従わなければならない。……

罪を犯すよりは死んだ方が良い。だまし取るよりは欠乏している方がよい。うそをつくよりは飢える方がよい。誘惑されるすべての者に次の聖句をもってサタンに立ち向かわせなさい。「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福でかつ安らかであろう」(詩篇 128:1, 2)。(教会への証 4 巻 493-495)

神から隠れるものはない

「あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから滅ぼし去るの でなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいないであろう。」(ヨシュア 7:12 下句)

ひとりの人の罪が、イスラエル人が敵の前で打ち破られる原因となった。祈り以上の何かが要求された。彼らは立ち上がり、イスラエルの陣営を清めなければならなかった。(原稿 12, 1893 年)

あなたはなぜアカンにつながりのあるすべての人が神の刑罰の対象となったのかについて考えたことがあるだろうか。それは彼らが神の律法という偉大な標準において彼らに与えられていた指示に従って彼らが訓練されず、教育されていなかったからである。アカンの両親は、自分の息子が主のみ言葉に従わなくてもかまわないと思うようなやり方で教育してきた。彼の生涯に植え付けられた諸原則が彼を導いて自分の子供たちも墮落するような方法で彼らを取りあつかうようにさせたのであった。……刑罰は……すべての者が不法にたずさわっていたことを明らかにしている。

アカンの経歴は、違反が捜し出されて罰せられるまで、一人の罪のために、神の怒りが民や国家の上に留まるという厳粛な教訓を与える。罪はその性質上、犯す者を墮落させる。致命的な病に感染した一人が、幾千もの人々にウイルスを感染させることができる。民の後見人として責任の

重い地位を占める人々が、もし忠実に罪を捜し出してとがめないならば、それは彼らが責任を果たしていないことである。……

神の愛は罪を軽んじるようには決して導かない。告白しない誤りをかばうことはない。……それは、わたしたちのあらゆる行為や思い、感情に関係がある。それは私たちの後をたどり、あらゆる密かな行為の源泉に達する。罪にふけることによって、人は神の律法を軽く見なすようになる。多くの人は仲間に自分の罪を隠し、神は不正を記録する程に厳格な方ではないと思いが上がる。しかし、神の律法は義の崇高な基準であり、それに対して人生のあらゆる行為は、良かろうと悪かろうと、神がすべての事を裁かれる日に、すべての隠れたことと共に比較されなければならない。心の純粋さは、純粋な生活へと導く。罪に対する弁解はすべて無駄である。神が罪人に不利な証言をなさるとき、彼を誰が弁護できるのだろうか。(SDA バイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 996, 997)

4月25日

遅すぎた！

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける。」(箴言 28:13)

アカンは罪を告白したけれども、時はすでにおそく、彼にはなんの役にも立たなかった。彼は、イスラエルの軍勢がアイで敗北し、失望したのを見た。しかし、彼は進み出て罪を告白しなかった。彼は、ヨシュアとイスラエルの長老たちが、言葉で表現できない大きな悲しみのうちに、地にひれ伏したのを見た。もし彼がそのときに告白していたならば、それは、真の悔い改めの証拠となったことであろう。しかし、彼は、まだ黙したままであった。彼は、大きな犯罪が行なわれたこと、そして、その罪の性質さえもはっきり宣言されたのを聞いた。しかし、彼は、くちびるを閉じていた。それから厳粛な調査が始まった。彼の部族、氏族、そして家族が指摘されたとき、彼の心は、恐怖にふるえたことであろう。それでも彼は告白しなかったので、ついに、神の指が彼を指さすにいった。こうして、彼は、罪をこれ以上かくすことができなくなって事実を認めた。同様の告白が、なんと多くなされていることであろう。事実が証明されたあとで、それを認めることと、神とわれわれだけに知られた罪を告白するのとは、非常な相違がある。アカンは、告白することによって、犯罪の罰をのがれようとする気がなかったならば、告白はしなかったことであろう。しかし、彼の告白は、その刑罰の正当なことを示したに過ぎなかった。彼は、罪に対する真の悔い改めも、悔悟も、目的の変更も、悪に対する憎しみも感じていなかった。

すべての人の運命が、生か死かに決定したあとで、罪人が神のさばきの座の前に立つとき、同じような告白をする。……天の記録が開かれるとき、審判の主は、人の罪を言葉で宣言されるのではなくて、心の奥底まで見抜き、人を納得させずにはおかぬまざしでござらんになる。そうすると、すべての行為や、人生のすべての取り引きが、悪者の記憶にまざまざと印象づけられる。ヨシュアの時代のように、部族から氏族と人をさがし出す必要はない。彼自身のくちびるが、その恥を告白する。そのとき、人に知られなかった隠れた罪が、全世界に広く知られるのである。(人類のあけぼの下巻 121-123)

もしあなたに告白すべき罪があるなら、時を逃してはならない。一瞬一瞬が貴重である。「もしわたしたちが自分の罪を告白するならば、彼は真実で正しい方であるからその罪を許し、すべての不義からわたしたちを清めてくださる」(ヨハネ第一 1:9)。(ヘレテッド・メッセジ 1 巻 352)

偽りの代価

「偽りを言うくちびるは主に憎まれ、真実を行う者は彼に喜ばれる。」(箴言 12:22)

イスラエル人は、シケムからギルガルの陣営へもどった。するとまもなく、ここに見知らぬ代表団がやってきて、協定を結びたいと希望した。使節団は、遠い国からやってきたと言い、彼らのようすからすればそれが真実らしく思えた。彼らの衣服は古びて破れ、くつはつぎ当てがしてあり、食料品はかびがはえ、酒を入れる皮袋は破れたのを旅の途中で急いでつくろったかのようにしぼりつけてあった。……

この陳情は成功した。ヘブル人は、「主のさしずを求めようとはしなかった。そしてヨシュアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた」。こうして契約が結ばれた。……

しかし、ギベオン人が正直にイスラエル人と交渉したのだったら、事はもっとうまくいったであろう。彼らは主に服従したことによって生かされたが、彼らの欺瞞は不名誉と苦役をもたらしたにすぎなかった。神は、異教を捨ててイスラエルに加わりたい者は、だれでも契約の祝福を受けられるように道を備えておられた。「あなたがたと共にいる寄留の他国人」(レビ記 19:34) の条件に彼らは含まれ、この種の人たちは、ほとんど例外なしに、イスラエルと同じ恩典と特権を受けられるのであった。主の命令は次のようなものであった。「もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをしえたげてはならない。あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならない」(同 19:33, 34)。

もしギベオン人が欺瞞的な手段に訴えなかったら、このような立場を与えられたのであった。「王の都にもひとしい」町の住民で、「そのうちの人々が、すべて強かった」といわれていた人々にとって、子孫末代まで、たきぎを切ったり、水をくんだりする者となることは、けっしてなまやさしい屈辱ではなかった。彼らは、欺瞞の目的で貧しい着物を身につけていたが、それは彼らがいつまでも人に使われる身分であるしとして、彼らにつけられた。こうして、何代にもわたって、彼らの奴隷状態は、神が虚偽を憎まれる証拠となるのであった。(人類のあけぼの下巻 129-133)

4月27日

この山地をわたしにください

「わたしは……今もなお、モーセがわたしをつかわした日のように、健やかです。それで……この山地を、どうか今、わたしにください。」(ヨシュア 14:10-12)

土地の分配をはじめる前に、カレブが、彼の部族の首長たちを従えて、特別な要求をもって出頭した。ヨシュアを除けば、カレブは、今や、イスラエルで最年長者であった。斥候たちの中で、カレブとヨシュアだけが、約束の地について、よい報告をもち帰って、人々に主の名によってのぼって行ってそこを占領するようにと励ましたのであった。カレブは今、彼の忠誠の報いとして、そのとき与えられた約束、すなわち、「おまえの足で踏んだ地は、かならず長くおまえと子孫との嗣業となるであろう。おまえが全くわが神、主に従ったからである」という約束をヨシュアに思い出させた。そこで彼は、ヘブロンを自分の所有としてもらいたいと願い出た。……彼の要求はすぐになぜか。この巨大な要塞の征服は、だれよりも彼にまかせるのが一番安全であった。……カレブの信仰は、今も、かつて斥候たちの悲観的な報告と反対のあかしをたてたときと全く同じであった。彼は神がご自分の民にカナンを占領させると言われた約束を信じていた。この点において彼は全く主に従ったのであった。彼は、民と共に荒野での長年の放浪に耐えて、失望と罪の重荷を共に味わった。それでも、彼はそのことについてなんの不平も言わずに、荒野で兄弟たちが滅ぼされたときにも彼を生き長らえさせてくださった神をあがめた。……この勇敢な老戦士は、神の栄えとなる模範を人々に示し、父祖たちが征服不可能と考えていた土地を征服するように部族を大いに激励しようと熱望していたのであった。

カレブは、四十年間心にきめていた嗣業を手に入れた。そして神が共にいてくださることに信頼して、「アナクの子三人を追い払った」。……

臆病者と反逆者は荒野で滅びた。しかし、正しい斥候たちはエスコルのぶどうを食べた。おのおのその信仰に従って与えられた。信じない者は、彼らの恐れていたことが実現するのを見た。神の約束にもかかわらず、彼らはカナンを継ぐことは不可能だと断言し、そしてその通りカナンを所有することができなかった。しかし、神に信頼した人々は、遭遇すべき困難を見ないで全能者の力を見、よい地にはいった。(人類のあけぼの下巻 139-142)

鉄の戦車

「ヨセフの子孫はヨシュアに言った、『あなたはなぜ、わたしの嗣業として、ただ一つのくじ、一つの分だけを、くださったのですか。』」（ヨシュア 17:14）

土地の分配についてのもう一つの要求は、カレブの精神と全く異なった精神をあらわしていた。それはヨセフの子らであるエフライムの部族とマナセの半部族から持ち出されたものであった。この部族は人数が多いことから、二倍の地域を要求した。彼らのために指定された土地は最も肥えた土地で、シャロンの肥沃な平野を含んでいた。しかし、谷間の主要な町の多くは、まだカナン人が占領していたので、この部族は彼らの領地を征服するほねおりと危険にしりごみし、すでに平定された地域を余分につけ加えてほしいと希望した。エフライムの部族はイスラエルの最も大きい部族の一つで、また、ヨシュア自身の属している部族であったので、彼らは当然特別な考慮をしてもらう資格があると考えた。「わたしは数の多い民となったのに、あなたはなぜ、わたしの嗣業として、ただ一つのくじ、一つの分だけを、くださったのですか」と彼らは言った（ヨシュア記 17:14）。しかしこの妥協することを知らない指導者に、厳格な公正を曲げさせることはできなかった。

彼は答えて言った。「もしあなたが数の多い民ならば、林に上って行って、そこで、ペリジびとやレバイムびとの地を自分で切り開くがよい。エフライムの山地が、あなたがたには狭いからだ」（同 17:15）。

彼らの答えは不平の真因を暴露していた。彼らはカナン人を追い払う信仰と勇気に欠けていたのである。「山地はわたしどもに十分ではありません。かつまた平地におけるカナンびとは、……みな鉄の戦車を持っています」と彼らは言った（同 17:16）。

イスラエルの神の力は民に対して保証されていたので、もし、エフライム人がカレブの勇気と信仰をもっていたら、どんな敵も彼らの前に立つことはできなかったであろう。困難と危険を避けようという彼らの明らかな願いに対して、ヨシュアはこう言って応じた。「あなたは数の多い民で、大きな力をもっています。……カナンびとは鉄の戦車があつて、強くはあるが、あなたはそれを追い払うことができます」（同 17:17,18）。こうして彼らの議論は自身たちに不利な結果をもたらした。彼らが主張するように、彼らは強大な民だから、兄弟たちと同じように、自分たちの道を十分に切り開いて行くことができたのである。神の助けによって、彼らは鉄の戦車を恐れるにはおよばなかったのである。（人類のあけぼの下巻 142, 143）

4月29日

わたしは…

「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。」(ヨシュア 24:15)

ヨシュアは、自分のからだが徐々に老衰していくのを感じ、まもなく務めを終えなければならないことを自覚して、彼の民の将来を非常に憂慮した。人々がもう一度この年老いた指導者のまわりに集まったとき、彼は父親以上の愛情をもって、彼らに語りかけたのである。……

ヨシュアの指示に従って、契約の箱がシロから持って来られた。これは、非常に厳粛な時の一つであって、この神の臨在の象徴は、彼が人々に与えようとした印象を強固なものにした。彼は、イスラエルに対する神の恵みを示したあとで、主の名によって、彼らがだれに仕えるかを選べと人々に呼びかけた。偶像礼拝は、なお、ある程度まで、ひそかに行なわれていた。それでヨシュアは、彼らに決心を促して、イスラエルから、この罪を除こうとしたのである。……ヨシュアは、強制的でなくて、彼らが心から神に仕えるようになることを望んだ。……

「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」とヨシュアは言った。指導者の心に燃えたのと同じ清い熱望が人々に伝わった。彼の訴えに全員は答えて言った。「主を捨てて、他の神々に仕えるなど、われわれは決していたしません」……

ヨシュアは、聴衆がよく自分たちの言葉を熟考して、彼らがなしとげられないような誓いをしないように、彼らを導こうと努めた。彼らは、熱誠こめて宣言をくり返した。「いいえ、われわれは主に仕えます」。彼らは主を選んで、主に仕えることの証人と自らなることをおごそかに承認して、「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きたがいます」と、彼らの忠誠の誓約をもう一度くり返したのである。……

イスラエルのためになすべきヨシュアの働きは終わった。彼は、「全く主に従った」そして彼は、神の書の中で「主のしもべ」と書かれている。彼の労苦の恩恵をこうむった時代の人々の歴史は、公の指導者としての彼の品性の尊い証言である。「イスラエルはヨシュアの世にある日の間、また……ヨシュアのあとに生き残った長老たちが世にある日の間、つねに主に仕えた」。(人類のあけぼの下巻 153-158)

わたしがあなたを つかわすではありませんか

「主はふり向いて彼に言われた、『……わたしがあなたをつかわすではありませんか』。」(士師記 6:14)

ギデオンに、人々を救えという神の召しが与えられた。彼は、そのとき、麦を打っていた。彼は、隠してあったわずかばかりの麦を、一般の麦打ち場で打とうとしないで、酒ぶねの近くの場所に行った。まだ、ぶどうの熟するときはずっと先だったので、ぶどう畑のほうに注意をするものはいなかったからである。ギデオンは隠れて黙って働いていたが、イスラエルの状態を悲しく思い、どうしたなら人々から圧迫者のくびきを除くことができるだろうかと、思索していた。

すると突然、「主の使」が現われて、彼に言った。「大勇士よ、主はあなたと共におられます」。彼は答えた。「ああ、君よ、主がわたしたちと共におられるならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょうか。わたしたちの先祖が『主はわれわれをエジプトから導き上られたのではないか』といって、わたしたちに告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、主はわたしたちを捨てて、ミデアンびとの手にわたされました」。

天からの使者は答えた。「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出さない。わたしがあなたをつかわすではありませんか」。(人類のあけぼの下巻 192, 193)

ギデオンは、目前にある大きな働きに対して自分自身の不十分さを深く感じた。……主は必ずしもみ業のために並はずれた才能の人々を選ぶとは限らない。しかし、主は最もよく用いることのできる人々を選ばれる。神により奉仕をする者は、しばらくは無名のままでおかれ、主により注目されず、用いられもしないように見えるかもしれない。しかし、もし彼らがキリストのために喜んで働き犠牲を払う気持ちを抱きつつ、低い地位の義務を忠実に果たすならば、主はご自分でお定めになった時にもっと重い責任を任せるであろう。

謙遜は榮譽に先立つ。主は、自分の無価値さと能力不足を最も感じている人々を用いることがおできになる。主は彼らに信仰の勇気を発揮するように教えられるであろう。主は彼らの弱さを主の力に結びつけて強くし、彼らの無知を主の知恵に結合して彼らを賢くなさるのである。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホワイト・コメン] 2 巻 1003)

研究 3

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



「目的と過程」

試みられる＝精錬する＝過程

目的があるとき、過程に対して何も言わなくなります。過程についてずっと考え、話している間は、目的地に着くことはありません。

過程を通る前と通った後の経験について、次の聖句をみてみましょう。

「わたしたちは、今は、鏡に映して（自然界を通して：被造物を見て）見るようにおぼろげに（創造主を）見ている。しかしその時には、（彼の）顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は（過程だから）一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように（神がわたしの目的を知っておられるように）、（過程を経たときには）完全に知るであろう」（コリント第一 13:12（）は付記）

この過程は、神を知るために通る経験です。そして、この過程を通った人々は天で、神に栄光を帰すだけの生活となります。

「試錬（過程）を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう」（ヤコブ 1:12）。

この過程を経た人々の中にアブラハムがいました。その過程が創世記 12－22 章に記されています。この過程を経たアブラハムについて、神は「わたしは今…知った」と言われます。この過程に注意を奪われて語り尽くそうとすると、結果にたどりつかなくなります。イサクが経た過程はどのようなものだったのでしょうか。創世記 26 章を見ますと、イサクが敵に譲って井戸を掘り続けた経験を読むことができます。

「イサクはそこから移ってまた一つの井戸を掘ったが、彼らはこれを争わなかったので（過程完了）、その名をレホボテと名づけて言った、『いま主がわれわれの場所を広げられたから、われわれはこの地にふえるであろう』（創世記 26:22（）

付記))。これは本物の光になるために経た過程でした。光になったとき、栄光を帰すことができるのです。火をつけたらすぐに光になるわけではありません。磨くことによって光になることができます。同じように、イエスは「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」と言われました(ヨハネ 15:8)。わたしたちが実を結ぶことは、すなわち御父に栄光を帰すことです。しかし、農業には過程があります。

「キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キリストの実物教訓 47)。

また別の観点から、目的について考えてみます。ここに東京に行く人とフィリピンに行く人が同じ那覇空港にいるとします。各々が目的地をもって那覇空港まで来たはずですが、もし、目的地の違う二人が一緒にいようとしたらどうでしょうか。那覇空港にずっと止まっていることになり、結局は、那覇が目的地になります。このような霊的な歩みはどうでしょうか。

真に目的地に到達するためには、目的地も過程も主からでなければなりません。光になるためには、ともし火と油が必要です。霊的にも同じように、光になるためにはみ言葉と御霊が必要です。光になるための過程のみ言葉と御霊によって導かれます。

「しかし彼はわたしの歩む道を知っておられる(信仰)。彼がわたしを試みられる(過程)とき、わたしは金のように出て来る(目的)であろう(知る)」(ヨブ 23:10)。神から「全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者」と証されたヨブは、自分が「金のように」なるためには、過程を経なければならないことを知っていました。そして、自分の主が道(過程)も、結果(目的)もご存じであることを知っていました。この信仰によって、彼は主の賜わる過程を経て、金のように出てきたのでした。これが始めに見たパウロの証と同じ経験です。

「しかしその時には、(彼の)顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は(過程だから)一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように(神がわたしの目的を知っておられるように)、(過程を経たときには)完全に知るであろう」(コリント第一 13:12)。この信仰をもってイエスにつながる者は、「実を豊かに結び、…それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」(ヨハネ 15:8)。

では、目的も過程も主をご存じですが、その過程を、どのようにして進んでいくのでしょうか。実を結ぶためには、種をまき、種が芽を出して成長し、実るまでの季節があります。一般的には春が種まき、夏が成長、秋が収穫の季節で

す。しかし、その過程には進むための力が必要です。この力が雨です。すなわち、過程を進む力も、「雨を降ら」せて下さる神から受けるのです。このことについて、ヤコブは次のように述べました。「だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている」(ヤコブ 5:7)。

今の時代は、ポンプで水がいつでもあるため、求めようとしません。ロトの選んだ水の豊かな平原ソドムもちょうどそのような地でした。ロトの住んだソドムでは、祈らなくても農業ができました。しかし、アブラハムの農業は、神に寄り頼む農業でした。

雨は聖霊を象徴しています。マタイ 25 章にある油と同様です。雨がいないとき、人は請い求めます。そして、請い求めるならば、雨を与えると約束して下さいました(ホセア 6:3、ゼカリヤ 10:1)。その雨を一度だけではなく、種まきを発芽させるために降る前の雨と、収穫を実らせ刈り入れの準備をさせる後の雨が約束されています。しかし、農業が人の成長のための過程を表しているように、「地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」そのすべての過程において、天から神様が降らせて下さる雨が必要です。この過程がなければ、収穫には至りません。これは、個人の成長においても、また福音宣教の時代における神の国の成長においても同様です。使徒時代におけるペンテコステに見られた聖霊の降下は前の雨でした。そして、終わりの時代に福音を全世界に伝えてキリストの再臨に備えさせる後の雨が約束されています。

「天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える」(イザヤ 55:10)。これが雨の働きです。

「キリストの品性(栄光)が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キリストの実物教訓 47)。キリストの民の中にキリストの品性、すなわち栄光が再現されるとき、父が栄光をお受けになります。

「クリスチャン生活の目的は、実を結ぶことである。すなわち、信者の中にキリストの品性が再現され、それがまた他の人びとの中に再現されるようになるためである」(キリストの実物教訓 46)。すなわち、「種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える」ということです。

この「目的」のために「過程」が与えられ、またその「過程を通る力」も約束されています。すべてを持っておられ、与えて下さるお方に全面的に信頼する信仰を持つ人は必ず、このすべてを受けて、目的地、すなわち神のご品性に到達するようになります。

しいと要求しました。祭司長は『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい』と言いました。

しかしピラトは自分のこれまでの弱さに腹を立てていたので、ねたみ深くて意地の悪い祭司や役人たちを完全に軽蔑しました。そこで彼は「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」と答えました。

兵士たちは自分たちの間でイエスさまの服を分けました。一着はぬい目なしに織ったもので、これについて争いが起こりました。彼らは最後にはくじを引いて問題を解決しました。神の預言者は彼らがこれをするであろうことをあらかじめ語っていました。彼はこう書きました。

「まことに犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。……彼らは互いにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きにする」(詩篇 22:16, 18)

イエスさまが十字架に上げられるとすぐに恐ろしい光景が起こりました。祭司たち、役人たち、律法学者たちは暴徒たちと一緒にあって瀕死(ひんし)の神の御子を冷笑しあざけりました。

「あなたがユダヤ人の王であるなら、自分を救いなさい」(ルカ 23:37)。

「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」(マタイ 27:42, 43)。

「そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、『ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、十字架からおりてきて自分を救え』」(マルコ 15:29, 30)。

キリストは十字架から降りてくることもおできになりました。しかしもしこのお方がそうなさったならば、わたしたちは決して救われることはなかったのです。わたしたちのためにこのお方は自発的に死なれました。

「しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ 53:5)。

ココナッツシロップ餅菓子

(Biko With Latik)

材料

もち米	1 カップ半
水	1 カップ1/4
黒糖	1カップ1/2 (半カップ：シロップ用、1カップ：餅用)
ココナッツミルク	4カップ

作り方

1. もち米を小さな鍋に入れて、何回かすすぎ、良く洗います。
2. 水を加えてまぜ、ゆでます。沸騰したら弱めの中火にして、水分がなくなるまで調理し、火から下ろします。(半分だけ火を通します)
3. ココナッツシロップを作ります。1カップのココナッツミルクと半カップの黒糖を別の鍋に入れます。
4. 沸騰させたら、弱めの中火にして、10 分間火にかけ、焦げ付かないように混ぜ続けます。
5. 煮詰まるとろとしてきたら、火から下ろします。
6. 今度はもちを調理します。ココナッツミルク 3 カップと黒糖 1 カップを入れてかきまぜ、沸騰させます。
7. もち米を加えてまぜます。中火で 30 分くらい火にかけ、粘りが出るまで混ぜ続けます。油が浮いてきて、粘りがとても強くなったらできあがりです。
8. 火から下ろして、耐熱ガラスの容器に移し、平らにしてから、先ほど作ったココナッツシロップを上塗り、照りを出します。
9. 室温にまで冷ましてから (よく冷ます方がいいです)、切り分けます。

ほんのりした甘みがおいしいフィリピンのお菓子です。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第49話

カルバリー（II）

兵士たちが彼らの仕事をしていた時、イエスさまの思いはご自分の苦しみを越えてご自分の迫害者たちがいつか会わねばならない恐るべき報いへと移りました。このお方は彼らの無知をあわれんで、祈られました。

「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」

キリストはみ父の御前で人のための仲保者になられる権利を得ておられました。敵のために祈られたこのお方の祈りは世界を包含していました。それは世の初めから時の終わりに至るまでかつて存在し、これからも生存するすべての罪びとを含んでいました。

わたしたちが罪を犯すたびに、キリストは新たに傷つけられるのです。わたしたちのために、このお方はご自分の穴の開いたみ手をみ父の御座の前に上げて言われます。「彼らをお許してください。彼らは何をしているのかわからずにいるのです。」

キリストが十字架にくぎづけられると、かんじょうな男たちがそれを持ち上げ、そのために用意された場所に乱暴に落とし込みました。これは神の御子に最も激しい苦痛を引き起こしました。

ピラトはその時、ラテン語とギリシャ語へブル語で罪状書きをしるして、みんながそれを見ることができるよう十字架上のイエスさまの頭上につけさせました。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書かれていました。

ユダヤ人たちはこれを変更してほ



(41 ページに続く)